

<校訓>  
高志共生

大庄中通信

大庄中学校  
H26年度第14号  
(H26.7.18・金)

## 5段階評定のつ仕方

小学校では、文章表現による3段階の評定が行われています。これに対して、中学校では、数字による5段階の評定が行われ、通知表や調査書、指導要録が作成されます。2・3年生の保護者の皆様は、昨年度もお知らせをしていますので再度になりますが、中学校の通知表の5段階評定のつ仕方についてお知らせをします。

ほとんどの保護者の皆様が中学生だった頃は、各段階の人数配分の目安が決められている「相対評価」という方法で評定が行われていました。しかし、兵庫県を含めたほとんどの都道府県で、前回の学習指導要領の改訂（平成14年度実施）に伴い、評価の方法が「相対評価」から「絶対評価」に変更となりました。

### 集団の中での位置を示す「相対評価」

「相対評価」は、集団（学年）の中で、他の生徒との比較した相対的位置で評価をする方法ですから、学年の中でどれくらいの位置にいるのかがおおよそわかります。例えば、本校の3年生と同じ149人の学年なら、成績順に上から10人が「5」（7%）、次の36人が「4」（24%）、次の73人が「3」（49%）、次の25人が「2」（17%）、次の5人は「1」（3%）という人数配分になります。各段階の境界線のあたりで、ほとんど差がない場合は、人数が多少増減することもあります。ほぼこの%に基づいて評定を行います。ですから、ある教科で「4」がついていれば、「学年で10番には入ってないけど45番くらいまでにいるのか…」ということがわかります。しかし、「3」は幅が広く学年の人数によっては人数がとて多くなる場合がありますので、「真ん中あたり」とか「普通」といったイメージになりがちですが、同じ「3」でも、「4」に近い「3」と「2」に近い「3」とでは、学年の中の位置でかなり差がある場合がありますので、相対的位置を正確に示しているとは言えない一面もあります。



### 目標への達成状況を示す「絶対評価」

これに対して、「絶対評価」は、各教科の目標や内容をどの程度達成できたかを評価する方法で、文科省などの説明によりますと、機械的に人数が割り当てられている「相対評価」に対する反省ということもあったようです。各教科の目標に対する個々の生徒の達成状況を示しそのあとの学習指導に生かすという評価の本来の目的に沿った評定をするべきだ、ということが「絶対評価」への変更の大きな理由だと思います。

具体的には、各教科の観点について、単元ごとに評価規準に基づいて、A→【十分満足できる】、B→【おおむね満足できる】、C→【努力を要する】で評価し、その観点を学期分で総括して学期の観点の評価を決め、それを得点化して5段階評定が決定されます。

例えば、ある観点で1学期に5つの単元を学習したとします。それぞれについて、A・B・Cで評価をします。そして、Aを3点、Bを2点、Cを1点として合計し平均して、学期の各単元の観点の合計が決まります。それに加

えて、定期考査等ペーパーテストでのその観点の得点を加え、さらに、観点によっては提出物や作品の評価など日常の学習活動でのその観点の評価も加えます。定期考査等については、80%以上をA、79～50%をB、49%以下をCとして観点の評価に組み入れます。このように、たくさんの資料を学期ごとに総括して、1つの観点の学期ごとのA・B・Cを決めます。

### 観点(A・B・C)から5段階を決定する「絶対評価」

次に、各観点の学期の評価を得点化して5段階評定を決定する際には、観点ごとに、Aを5点、Bを3点、Cを1点として、4つ（国語の場合は5つ）の観点の得点を合計し、観点の数で割り、それを四捨五入した数値が5段階評定となります。例えば、観点が4つの教科で、Aが2つ、Bが1つ、Cが1つの場合は、 $A \cdot A \cdot B \cdot C$ ですから、 $(5+5+3+1) \div 4 = 14 \div 4 = 3.5$ となり、四捨五入して5段階評定は「4」となります。

技術家庭科と保健体育科では、教科の特性から、いずれかの観点の比率を大きくする「重みづけ」を行っています。例えば、保健体育では、「運動の技能」の観点の得点を2倍しますから、「運動の技能」がAなら10点、Bなら6点として合計点を算出し、合計点を5で割って評定が決まります。観点4つで重みづけなしの場合の観点の評価と評定の関係は次の通りです。

|  |  |  |
|--|--|--|
| $A \cdot A \cdot A \cdot A \rightarrow 20$ 点で「5」 | $A \cdot B \cdot B \cdot B \rightarrow 14$ 点で「4」 | $B \cdot B \cdot B \cdot C \rightarrow 10$ 点で「3」 |
| $A \cdot A \cdot A \cdot B \rightarrow 18$ 点で「5」 | $A \cdot A \cdot C \cdot C \rightarrow 12$ 点で「3」 | $A \cdot C \cdot C \cdot C \rightarrow 8$ 点で「2」  |
| $A \cdot A \cdot A \cdot C \rightarrow 16$ 点で「4」 | $A \cdot B \cdot B \cdot C \rightarrow 12$ 点で「3」 | $B \cdot B \cdot C \cdot C \rightarrow 8$ 点で「2」  |
| $A \cdot A \cdot B \cdot B \rightarrow 16$ 点で「4」 | $A \cdot B \cdot C \cdot C \rightarrow 10$ 点で「3」 | $B \cdot C \cdot C \cdot C \rightarrow 6$ 点で「2」  |
| $A \cdot A \cdot B \cdot C \rightarrow 14$ 点で「4」 | $B \cdot B \cdot B \cdot B \rightarrow 12$ 点で「3」 | $C \cdot C \cdot C \cdot C \rightarrow 4$ 点で「1」  |

### 日常の学習活動も5段階評定の大切な資料

「相対評価」でも同じでしたが、「絶対評価」の各教科の観点は、ふだんの学習活動も評価の対象になります。宿題や提出物、ノートやプリントやワーク、小テスト、作品、実技テスト、授業での取り組みや発表、欠席や忘れ物の有無などが評価の資料となり、観点のA・B・Cが決めます。「絶対評価」の方が、5段階評定にふだんの学習活動の状況が影響すると言えます。ですから、テストの点数は良いのに、「5」や「4」にならなかったり、実技教科で実技の技能（成績）は高いのに、「5」や「4」がつかなかったり、ということもあります。

### 1・2学期は途中経過

1学期と2学期の成績は、1年間の途中経過です。1・2・3学期を総合したものが1年間の成績（通知表で「学年」となり、進路の際の調査書や学校に保存する指導要録にも記載する年間の成績となります。ですから、1学期の成績が多少悪くても、2・3学期で取り戻すことは不可能ではありません。

## 昨年度から通知表をコンピュータで作成

終業式の日にお渡しした通知表は、昨年度から市内の全小中学校でコンピュータからプリントアウトしたものをお渡ししています。それに伴い、1学期の成績等だけを記載したもの（1学期）、1学期と2学期の成績等を記載したもの（2学期）、1・2学期と学年の成績等を記載したもの（3学期）の3枚の通知表を1年間にお渡しすることになりました。これは、一度お渡しした通知表に上書き印刷するのが難しいためです。また、従来のように、学期末にお渡しした通知表を次の学期始めに回収することはなくなりましたので、ご了解ください。

（文責：校長 福井 隆夫）